



TITLE:

世界ノ大戦(二)

AUTHOR(S):

原, 勝郎

CITATION:

原, 勝郎. 世界ノ大戦(二). 經濟論叢 1919, 8(1): 54-72

ISSUE DATE:

1919-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127477>

RIGHT:

講演

世界ノ大戰(二)

原 勝 郎

第五講 西部戰線

世界大戰は名の如く歐羅巴に於てのみ戰はれて居るのではない。亞細亞に於ても阿弗利加に於ても修羅場を現じて居る。亞細亞のバレスタインでアレンビー將軍の英軍が大に土軍を敗り、殆ど其戰鬪力を失はしめたのは世人の記憶に最も新なることであるし、阿弗利加では獨領東阿弗利加の戰鬪の如き、休戦期に入るまで歇まなかつた。歐羅巴に於ても、彼の敵味方をも辨じ難い程入り亂れた露國の戰沙汰をば別として、屢々英佛諸國非戰論者の非難の的となつたバルカンの戰線もあり、以太利の戰線もある。地上戰の外に空中戰もある。海上には堂々たる對戰こそ少いけれど、潛航艇の活動に至つては空中戰と共に、從來曾て見ざりし新奇なる戰鬪法であつて、これが爲めに戰爭の全局に影響を及ぼしたこと少々でない。

然しながら如何に潜航艇の威力が顯著であつたにせよ、獨逸は遂に之によつて英國を屈するところが出来なかつた。空中戦の如きは寧ろ地上戦の補助たるに過ぎない。バルカンの戦線に至りては最近聯合軍が此方面に奇功を奏し、勃牙利の降服から延いて、中歐同盟瓦解の端をなさしめた所を見ると、かなり重大な意義を有するものゝやうにも見えるけれど、勃牙利の降服は獨逸からの救援が不十分になつたが爲めで、其不十分なのは西部戦線から手を抜く餘裕がなかつたからだ。要するに西部戦線は世界大戰全局の骨子であつて、勝敗の最後の決は、是非とも茲に定まらなければならぬのである。されば大戰が四年餘になる迄長引いたのは、畢竟するに聯合國に於て此西部戦線で以て勝敗を決しやうとの決心が鈍かつたからである。然るに革命後の露國に愛想をつかし、据ゑなければならぬ度胸を漸く据ゑてから、西部戦線も茲に始めて其眞意義を有することゝなつたので、春から夏にかけての獨軍の大攻勢、續いて聯合軍の盛り返へし、いづれも開戦以來始めて戦争らしい戦争の光景を呈した。一九一四年の秋獨軍が勢に乗じて長驅し。強弩のはりつめて餘力の薄くなつた時、聯合軍が之を撃退した彼のマルン戦など、到底本年の戦の比ではない。故に極言すれば戦争は今年始まり今年終つたのだと云つても差支ない位で、聯合軍の決心の足らなかつたが爲に、戦禍を五十一ヶ月餘の久しきに亘らせ、避ければ避けることの出来た人命と財産との大損失を來したのだとも云へる。今日は此大戰の骨子たる西部戦線の戦況に就き昨年三月以來のことを極く簡単に申述べやうと思ふ。

一九一七年二月迄の西部戦線は大體に於て一九一四年九月マルン戦を終つた後の状態其儘と云

つてよい。一九一六年七月より十一月に亘る所謂ソナム戦は、聯合軍の勝利と稱へられて居り、獨軍のエルダン攻撃を牽制し得たのは其大手柄であるけれども兵員の損失に至つては獨逸軍と大差がなく、西部戦線の全體から見ると、大なる變動を認め得なかつた。然るに二月一日から、潜航艇を以て無拘束に商船撃沈をやる宣言して、それが爲めに米國との國交斷絶を惹き起した獨逸は、其同じ二月の末からして先づ英軍の前面で退却を開始した。されば茲に海と陸とに於て獨逸の軍事行動に矛盾があるやうに感ぜられるけれど、其實これは矛盾でない。獨逸は二ヶ年半の經驗によつて、全勝を制することの甚困難であることを覺つた。羅馬尼を敗つて以來頓に頻りに講和の希望を表明するやうになつたのは、要するにこゝらが講和の潮時と考へたからである。所が聯合諸國は容易に之に應じさうもない。そこで聯合國を威嚇する爲めに。一層はげしい潜航艇戦を以て之を惱ますことにしたのである。ところが陸上の方では、既に全勝を斷念し、進撃の衝動が減じたから、強ひて今迄の凸凹多き厄介な戦線を苦守する必要はない。それよりはもつと守り易い收約した戦線に據つて、ドローン・ゲームを期する方がいくら優しか知れないといふことになつた。これ海に於ては攻勢をとりつゝ、陸上に於ては守勢に出でた所以である。斯く解釋すれば毫も其間に矛盾する所がなく、澳帝カールが皇后の實家なるブルボン家を通じて、講和に關する佛國の意嚮を探らしめたのも、實に此昨年二月であることを併せ考へると、此間の消息が愈々明白に了解されるだらう。

事情此の如くであるからして、獨逸軍のヒンデンブルグ線迄の撤退は、餘儀なくされた點も無

いではないが、主として任意の行動である。其撤退は二月の下旬から三月の下旬迄つゞき、幅は英佛兩軍の正面百二十哩に亘り、最も深い所は二十哩程後へ引いたといふことで、而して此撤退によつて獨逸軍の節約し得た戦線の正面は四十哩に達したとのことだ。据膳を食はぬも如何と云つたやうな調子で、聯合軍の方では此撤退につれて前進を始めたが、敵の方が覺悟の上の退却であつた爲め捕虜も鹵獲品も共に極めて僅少であつたのは無理もない。

然しながら聯合軍は此前進からして景氣つき、四月上旬英國軍先づ攻勢をとり所謂アルラス會戦をやり、同月の中頃から佛軍も同様攻勢に出で、所謂エーヌ第二會戦をやつた。兩軍共に最初の景氣は悪くなかつたが幾もなく頓挫した。これは革命の露國が事實上獨逸と休戦同様の状態に陥つたので獨逸は東部戦線から其兵員の移動を行ひ、四月の末には佛白方面に百七十師團を集中し得た爲めで、扱て其百七十師團の内、三十師團は總豫備隊となり、あとは七十師團づゝ英佛兩軍に對峙したのだとも云ふ。それから六月になると英の第二軍は又攻勢に出で、所謂メツシーヌ會戦をやつたが百二十哩を隔てた倫敦まで聞える程の地雷爆發をやつた割合には其成功大ならず、それに續きて六月の末から七月にかけての獨軍の逆襲も、七月末英國軍の方から更に攻勢に出た第三イーブル會戦も、共に渉々しき勝敗なく、八月以後になると形勢概して英佛軍に有利であつたけれども、それとても著るしい成功と稱すべき程のことはなかつた。英の第三軍司令官ピング將軍が例の如く砲撃による準備をばせずに、一九一六年の秋から英軍が漸く使用し出した彼の「タンク」を用ゐて十一月下旬カムブレイ方面に對し突然行つた攻撃も、亦甚だ輕少な成功に終

つた。そこで獨逸は斯く體裁のよいうちに、何とかして有利な和議を講じやうとして、頻りにあせり出した。・ブレスト・リトヴスクの講和會議を幾度も中止したのは過激派と意見の合致を見ぬにも因り、獨逸の内部にも意見の不一致があつたからでもあるとは云ふものゝ、其實は斯く長引かしつゝある間に、露國を道具に使つて聯合諸國を誘ひ總講和に至らしめむとしたのが重なる理由と云はねばならぬ。然るに此希望は實現されさうにも見えないから、そこで三月三日に露國との講和條約を片付け、其月の二十一日からして、ソナム方面に未曾有の大攻勢をとり、英佛兩軍の接觸點なるサンカンタンを中心目標として左撃右搏し、アミアンを屠り巴里に迫らむとし、同時に長距離砲を以て巴里を砲撃し人心を動搖させむと企てた。蓋し獨逸軍最後の奮戦で、勝敗の決を此一舉に賭したものである。

此猛烈なる攻勢に對しては、流石の英軍もたゞろかざるを得ず、其グーチ將軍の第五軍はフォ・ン・ペロウの獨軍の爲めに手痛くフルラス方面に撃退せられ、中央軍は同じくマルキッツの獨軍に敗られ佛軍と連絡をとりつゝあつた第三軍亦フチャアの敗る所となり遂にソナムとオアズとの間で聯合軍の戦線が一度中斷さるゝに至り、佛の騎兵の到着によつて辛うじて連絡を回復することを得た。此大敗があつた爲に聯合軍も大に驚き、遂に總帥を任命して以て指揮の統一を圖り、協同動作を完全にせむことを期するに至つたのであるが、抑も今迄此任命を見なかつたのは、實に聯合軍の大なる失策であるので、是より先き聯合國は以太利軍のイゾンツォ戦線で大敗せるに驚き昨一九一七年十一月初に西部戦線及び以太利の戦線を通じて協同動作の實を擧ぐる目的を以て

常設の聯合軍事會議を設置することにしたけれど、然かし此會議は聯合各國から首相と外一名の閣員を出して之を組織すると云ふのであるからして、名は常設會議でも事實は常設でない。加ふるに聯合諸國がそれ／＼專斷の權を出來得る限り保留しやうと云ふのであるからして、此會議の設立によつて指揮の統一が直に満足に行はれず、従つて協同動作も遺憾なく出來るといふ譯にはならなかつた。そこで今斯かる體落では猛烈なる獨軍の攻勢に當ることが出來ぬことを覺り、愈々總司令官を置くことゝしたので、三月二十八日それに任命されたのは佛國のフェルデナン・フオツシユである。

總帥が出來たとて直ぐに戰の勝敗に利目のある譯ではなく、獨逸軍は四月に入つても依然として攻勢を續け北方ではフォン・アルニム將軍はフランダー方面の英葡兩軍の接觸點を目的として前進し、英軍を敗りて四月の末にはイーブルを距る二哩の地點まで達した。此方面に於ける獨逸軍の最も優勢なる時には、カレイの運命すらも氣遣はれたといふことである。然しながらイーブル方面も、アミアン方面も四月の末には獨軍の前進が停止して、戰線の固定を見ることが出來たのみならず、ルーデンドルフが獨軍を指揮することになつてから、五月の末にランス・ソアソンの線に於て獨軍が又攻勢をどり、ソアソンをば略取したけれども、此方面も亦六月二日巴里を距ること四十哩のシャトウ・チエリイに到つて停止した。但し獨軍の攻勢がこれで全く終つたのではなく六月九日にはノアヨン・モンチヂエー方面の佛軍を敗つたが、更に七月十五日に至つては、ランスの東西六十哩に亘り、六十四師國即ち總軍の約三分の一を以て大攻撃を試み、平均三哩の進

出をなして、一旦聯合軍に回復されたシャトウチエリーを再び奪還した。これ所謂第二マルン會戦である然しながらこれ獨軍の最後の前進であつて、其後三日にして聯合軍側の盛り返へしがフオツシュ將軍によつて始められたのである。

フオツシュ總司令官の率ある兵數は獨逸軍のそれに比べて少いものではなかつた。五月中頃に於て聯合軍側三百萬に對する獨逸方二百六十三萬九千といふのは、無論精密な計算ではあるまいが、全く取るに足らぬ數字でもなからう。加之、聯合軍の味方には、急速度を以て増加する新手の米國軍がある。けれども聯合軍は敵に比べて種々不利な點を有して居た。といふのは外ではない、北佛の戰線は巴里アミアンに面する方向に於て、袋の如く出張りたる曲線をなし、獨逸軍が其曲線の内側の方に在るに反し聯合軍は其外側に立つて居つた。されば獨逸軍の方は必要に應じ短き半徑によつて迅速に豫備隊を差し向けることが出来るけれども、聯合軍の方には此便利が全くない。加ふるに聯合軍の方は名の示すが如く集まり者である。如何に巧妙な協同方法を講じた所で獨逸軍のやうに揆を一にし得ぬといふ不利益がある。今年七月下旬以後聯合軍が如何なる順序を以て戰線に排列されて居たかを略述すれば、戰線の最北部には海に左翼を持たせて白耳義軍が居り、其南には佛軍の一部隊と英軍とがあり、葡軍の小部隊は英軍の間に介在して居る。此方面の英軍は即ブリュマー將軍の率ある第二軍であつて、其他の所謂フランダース軍と共に後に白耳義王アルベルの指揮下に屬することゝなつたのだ。其南に續くのはバードウツド將軍の英第五軍、其右でアルラス方面からドエーに向ふのがホルン將軍の率ある英の第一軍にして其最

左翼には加拿陀兵がある。其次はビング將軍の英第三軍、これには濠洲軍が居る。次はロウリジソン將軍の英第四軍で、即ち佛軍の左翼と聯絡するものである。其右即ち南からは佛軍受持の戦線となり、先づデブネイ將軍の率ある第一軍を最左翼とする。後に聯合軍が前進すると丁度サン・カンタンの邊が英佛兩軍の接觸點となつた。デブネイ軍の右には後れて戦線に加はつたウンベルの第三軍があり、其右にはマンジャン將軍の第十軍が列び、これからして袋のやうな曲線となし戦線は次第に東方に向ふのであるがマンジャン將軍の右にはデグットの第六軍ベルテローの第五軍及びグローの第四軍といふ順で、此グローのシャムバーニュ軍の東はミューズ河の兩岸からアルサス、ロルレインの方面の戦線を受持つ米軍に續くのである、然かし米軍には此外に白耳義王の配下に一部隊、英第四軍と共に行動する一部隊があり、佛軍の中に混するものとしては、マンシヤン、ベルテロー兩將軍の部下に各一部隊ある。而して此ベルテロー將軍の指揮には、佛軍米軍の外以太利軍の一部隊がある。此の如く複雑を極めた序列を以て聯合軍は最後の攻勢を執つたのだ。之をして機に應し一致の行動に出でしめ、八月中には既に勝ち軍の大勢を定め、八月の末までには將卒二十五萬餘の捕虜を得て、十月には獨軍をして屈服の外なきに至らしめたのは、聯合軍が愈最後の臍を固めたのと、米軍の助力の爲めに戦線の稀薄を免るゝに至つたのと、フォッシュ將軍の神算妙籌によるものであらう。

第六講 參戰後の米國

一九一六年の末大統領キルソンは交戰各國に要求するに、其各如何なる條件によつて講和せむ

と欲するやを開陳せむことを以てした。人道の爲めに戦争の終熄を圖つたのでもあらうが、論者或は之を以て、米國までが世界の大戦に捲き込まれさうな危険の愈々間近かに迫まつて來たから、此難を遁れむが爲めに、キルソンが自衛上講和の速成を希望したのだとも云ふ。主要なる動機の何れに存したにもせよ、彼の提議は中立國のうちでも最も優絶した米國の元首として、極めて相當な役割りを演じたものと云はなければなるまい。但し此の申出は十分なる効果を擧げ得ず、獨逸は飽くまでも無條件に潜航艇の戦をやらうといふので、二月に米獨の國交は斷絶し、四月六日には米國からして獨逸と交戦状態に在ることを宣言することゝなつた。これからして所謂米國式の活動が始まつたのである。

参戦した時の米國陸軍と云ふものは、誠に微々たる有様に在り、常備軍、民兵等諸種の部隊を合しても將校が九千五百二十四人下士以下二十萬二十千人あるのみであつた。そこで其數を増加する爲めに既設部隊を法律の許す限り増加したのみならず四月の下旬には徴兵法案を通過させた。これは年齢二十一歳より三十一歳に至るまでの壯丁をして申告せしめ、其中から必要な員數を抽籤によつて徴集するのである。而して其徴集すべき員數につきて、最初は其都度制限を置いたのであるけれど、後には大統領の見込に任かすといふことにした。

英國で當局の頭腦をなやました大問題であつた所の徴兵令の方は、米國では一息に成り立つたのであるが、扱て斯くして集める壯丁に必要な被服武器を供給し之に軍事教育を授けると云ふことが、これ既に容易ならぬ仕事であるのみならず、之を歐羅巴の戦場に送り出すことが更に大事

業である。其等の費用としては宣戦後幾もなく百四十億圓の軍費が可決せられ、其財源として軍事公債がリバーティ公債といふ名で發行された。租税と相待つて莫大なる歳出に應ずる爲めである。其第一回は一九一七年六月第二回は同年十月に募集せられたが、第一回は四十億圓、第二回は六十億圓の募入額であつたにも係はらず、兩度共に申込額の方が遙かに募集額に超過し、第一回には五割、第二回は更にそれより以上の超過を見たので、政府は其全部の申込に應せず、超過した中の半分程を採用することにした。

徴兵事務の方は、六月の大部分を申告登録に費し、六月二十二日には九百六十五萬人の登録を終り、其中先づ六十八萬七千を九月から十月にかけて入營せしむることにしたが、歐洲戰場へ派遣の方はそれ等の物になるのを待つては居らず。派遣軍の總司令官としては、最近メキシコ出征軍の司令官であつたバーシング將軍が任命され、同將軍は六月八日に既に倫敦に渡り、同月中旬には佛國に著した。司令官に少しく後くれて、米軍の先發部隊も、六月下旬には佛國の土を踏むことになり、それからして後は船繰りの都合の許す限り、後續部隊を渡海せしめ、宣戦後丁度百八十七日目で十月の中旬には、米兵の一部分が佛國に於て塹壕の勤務に就くことゝなつた。それから戦死者を見るに至つたのは十一月上旬のことである。

以上述べ來れば事極めて簡單のやうであるが、實際は中々複雑な仕事であつた。米兵の陸揚をなすに就きては、前以て埠頭の設備をもなさなければならなかつた。上陸地から屯營地迄特別の鐵道をも敷設した。其長さは宣戦後一ヶ年に六百哩に達したと云ふ。其線路を運轉する車輛は皆

米國から持参のものである。又先發の技師は佛國に於て材木の伐採から始めて半永久の兵舎の構造に従事した。食料品の如き本國から一々輸送したことは勿論である。金錢に苦まぬ國柄のこととは云ひながら其敏活に於ては實に稱讃を値するものであらう。

本國に於ては九月更に二百三十億圓の軍事費が可決された。其中で七十億餘りは公債の乗替へに宛てた者で、精密な意味に於ける軍事上の支出ではないけれど、それにしても莫大なる軍事費である。此金の出所は、公債にのみ依るではなく、新税をも宛てにしたので、所得税、戰時利得税及び酒税からのみでも合計凡三十億以上の歳入を得やうと云ふ計畫が兩院を通過した。但し參戰以前まで過つて一九一六年の戰時利得に課税しやうといふ案は幾ら米國でも行はれなかつた。

戰爭参加に伴つて起つた現象の主なるものを擧ぐれば其一是酒類禁止運動の勃興である。戰爭に際して殊に節酒若くは禁酒を目的とする立法をやつたのは、必しも米國のみに限つたことではないが、此方面に於て米國に特殊なやり方は食料品の節約の爲め、食料品よりして酒類を醸造することに嚴しい制限を加へ、食料にするよりも酒にする方がよい場合には、大統領の認可を得て醸造することにした。米國は其實食料品に左のみ不便を感じぬのであるからして、自國民のみの需要の爲めには斯かる制限を設くる必要を見ぬのであるけれど、聯合諸國の食料不足を救済する爲めに此の如く嚴しい節約法に出たのである。而して以前からの禁酒運動は此參戰を機會として從來の活動を一層擴張し、議會に於ては米國全體を禁酒國たらしむる目的を以ての建議案が通過し、更に之を各州の意見に問ひ其批准を求めて確定することゝなつたが、これは唯僅に十三州

のみの批准を得たに過ぎなかつたので、遂に其當の目的をば達し得なかつたけれど、事實上禁酒を實行する州の數が次第に増加して、二十七州の多きに達し、此十二月から復員の終る迄酒類の釀造を停止する令も出た。休戦になつても此禁令は弛めぬと稱して居る。

次に特筆すべきは造船業の發達である。抑も合衆國は十九世紀の初め一寸海運國になりかけやうとしたことがあつたけれど、其後頓挫して、國力に不似合な程微々たる海運力を持つて居た。されば大西洋方面の海運は歐洲殊に英國、次には獨逸船の橫行に任かせ、太平洋の方面は日本に比してすら遜色あるを免れなかつたのである。然るに此度の世界大戰が始まつてから、殊に米國の參戰以後、一は兵士及び軍需品を輸送し、聯合國に物資を供給し且獨逸の潛航艇の爲めに喪失せる分を補填する爲めに、非常なる勢を以て艦船の増建をやり出した。太平洋太平洋兩岸にある各造船所で大車輪で以て建造したので、單に其竣功の早さに於て從來の記録を破つたのみならず噸數の増加も亦夥しく、開戰以後本年八月の末迄に進水せる船舶六百五隻、其中艤裝を終つて引渡せるもの三百三十五隻、二百二萬噸弱に達したと云ふ。斯く米國が大規模に増建した船舶の單に一時の使用に供せらるゝのみでないことは、米國の當局者も最初からして言明して居ることであつて見れば、講和の成立した曉に日本の海運業に直接間接の影響を與ふること蓋し少くはなからうと考へる。

米國は斯く自國で拵へた船の外、外國から買入れ又は其他の方法例へば日本から船腹を借りたやうな方法によつて輸送を行つたからして歐洲派遣兵の數が急速に増加した。本年春フオツシュ

が新に西部戦線の總司令官となつて、獨軍の攻勢を喰ひ止めむとした時には、パーシング將軍は其部下の米兵を擧げてフォッシュに提供したが、其時には既に米軍にも二千三百餘りの損失があつた頃で、五月の始めになると參謀總長マーチからして在佛米軍五十萬以上との公表があつた。開戦當時の一萬足らずであつた米國將校が一ヶ年の内に十二萬四千弱に、二十萬二千の下士卒が百五十三萬弱に増加したのに照らすと、其中からの五十萬といふ出征軍も毫も驚くに足らぬことであるが、此後の増加に至りては更に一層急速で、六月中旬には八十萬以上となり、其一ヶ月後の七月中旬には米國陸軍の總數二百二十萬、其半數は出征軍で、其中七十萬は現に戦闘に従事し、四十萬は英佛兩國に於て教育中、英國だけでも米國兵は八十ヶ所に分れて訓練を受けつゝあると云ふ次第となつた。

此の如き夥しき數に達した上は、米軍の働き方にも變動のあるのが自然で、最初の如く何時までも英佛の軍隊の間に割り込んで働いて計りは居れぬ。そこでフォッシュ將軍の意見もあり、五月下旬から米兵のみの軍を編成することに著手し七月中旬迄に三軍團の成立を見、八月からは米國第一軍なるものが出來た。此米兵の大部分は前回にも述べた通り佛のシャムパーニュ軍の右に列らび、ミューズ河の兩岸からロルレイン及びアルサス方面を受持ちパーシング將軍の直支配の下に立つたけれど、其外フランダースにもカムブレイ方面にも其他にも英佛軍と混して七月以後の逆襲に参加したのである。斯しつゝある間に其兵數は七月下旬に出征軍總員百貳拾五萬となり八月一日には出征途上に在る者を加へて百三十萬一千、別に本國及び屬領に殘留する者は百四

十三萬二千を算し八月二十四日には出征軍百五十萬と注せられた。此頃の輸送力の増加は、一週間に十萬人を運び得たこともあり、八月一ヶ月の輸送人員は三十一萬三千で、即ち一日に平均一萬人つゝ大西洋を渡つたことになる。九月も略同様であつた。當局者は尙も多數の出征軍を派遣して一ヶ年後には在佛總員四百萬に達せしめやうといふ意氣込を示し、徴兵令に從來の二十一歳乃至三十一歳といふ制限を存して置いては必要な員數の壯丁を得ることが難いと云ふので、其改正を思ひ立つた。今迄の徴兵令によつて登録された者は多數であつたけれど、健康上の理由で不合格となつた者は勿論のこと、職業其他の關係からして徴集免除になつた者も少くない。其最も米國式なる一例を舉ぐれば野球をやる職業的運動家が免除されて居ることである。佛國の戦地に向けてバット一萬四千本を一度に送つた米國のことであるから、此式の免除も不思議ではないがこれを以て推しても免除者の多いことが分かるので、従つて今迄の徴兵令では不足を感じた。他國ならば斯かる場合には或は體格の再検査を行ふとか又は一旦免除した者を狩り立てる筈であるのに、其所は米國式の大ザツバな所で、直ぐに年齢制限の擴大と出掛け、十八歳より四十五歳迄と改正することにし、八月の末には両院の議決を経て法律となり九月中旬に新徴兵令による一千三百萬の登録を行ひ、最初の入營兵を決定する抽籤も休戦前に済んで居るから、若し戦争が永引けば此人數が陸續として出征すべきであつた。休戦の爲めそれには及ばずしてしまつたけれど九月以後も今迄の分のうちから次第に歐洲に向け出帆し、九月二十一日には出征兵百七十五萬を算し尙ほ十月に入り休戦の話が始まつてから、政府は追加豫算百二十億圓を議會に請求し、來年七月

一日迄に歐洲出征軍を五百萬にしやうと觸れ込んだ。兎に角に十一月の休戦迄には實際の人員二百萬を可なり超過したのである。

軍事上の企畫の規模が大きくなればなる程、費用の要るのは當然のことであるからして開戦以來一ヶ年間に既に百八十億圓程を費した。尤も其中八十億は聯合國への貸金であるからして米國自身が費したのは百億程になる。開戦滿一週年を期として更に第三回のリバーティ公債六十億圓を募集したが五月四日の締切りに申込額八十億圓以上に達し、其後も申込みが増加して、五月十七日に八十三億四千餘萬圓に達したが、此度は前二回と違ひ其應募額全部を採ることにした。七月上旬には二百四十一億餘圓の軍事費が更に議會を通過し九月には百六十三億餘の租税に因る歳入豫算案が提出され十月中旬には第四回のリバーティ公債が募集された。總應募金額百三十七億三千二百八十萬餘圓此中超過額は一億七千二百萬圓程で前回よりは少いけれども、其總額に於ては前三回を凌駕すること、遠い。當局者の見込みによれば若し此儘來年六月迄戦争が繼續するとすれば、戦費の總額九百七十三億六千五百五十三萬八千五百五十圓の多額に達し、一ヶ月平均四十億、一日平均一億三千百三十萬餘圓に達する豫定であつたといふ。戦争が濟んだ爲めに此豫定額には達せずに終つたけれど、それにしても米國の戦費は、聯合諸國のいづれよりも比較上多かつたので、既に八月の下旬頃で、一日平均一億圓を費消し、英國の戦費に比して五割多かつたといふことだ。八月三十一日一日の支拂高のみで三億一千二百萬圓に上つたことも、一日の支拂高としては合衆國ですら例のないことだと云はれて居る。

以上の數字は英米の新聞雜誌其他から拾ひ集めたものであつて、戦費にも實は色々の計算法があり、各報道の元に遡つて吟味をしなければ、系統的な正確な計數とは稱し難く、予の今日の講演はそれ迄に深入りして研究したものではないからして、甚杜撰の譏りを免れぬのであるが、然かし以上述べただけでも、開戦以來の米國の活動が如何に大規模のものであつたかと窺はれる。けれどもそれよりも更に驚くべきのは、斯かる大活動が民主國の合衆國に於て極めて無造作に行はれつゝある一事である。

米國に於ては戦争参加以前に於てこそ、議會に於てキルソンの政策に反對する者、殊に上院に於て少數ながら相當の勢力を有して居つたのだが、これは當時米國の態度の一定せず、従つて反對者がまだ絶望するに及ばなかつたのと、一には上院の反對者等が討論終結といふ手續の議事法になきに乗じて、議事の進行を妨害したのにも原因する。そこでキルソンは國交斷絶の後、先づ此議事法を改正し、討論を無限に長引かすことの出来ぬやうにした。議會の反對連は之によつて大に屏息せしめられたが、國交斷絶が一轉して宣戰となるに及び、反對者中にも熱心なる戦争遂行論者を生ずるといふ勢で、大統領の提出する議案は反對があつても極め少數、時としては満場一致で議會を通過することゝなつた。これは斯くなつた上反對したとて詮がないと諦めをつけたのと、戦争をやる以上は生ま温いやり方ではいかぬといふ道理を悟つたのと、今一つは人氣といふものが米國で偉大なる勢力を有し、大抵の者は之に風靡され壓服せられて屏息すること、他國よりも更に甚しい傾向のあるとに基因する。他の歐洲諸交戰國では、專制者の權力が一般に失墜

して、民主々義が勃興したのに反し、戦時となつてからのキルソン大統領の權威といふものはそれは實にすばらしいもので、單に提出の議案の一瀉千里で通過するのみではない。開戦少し前に鐵道従業員の罷工を仲裁して八時間労働を實施せしめた上、参戦後は更に合衆國の鐵道全部を一令の下に政府の管理に移したなども、随分目覺ましいやり方だ。造船所や其他の工場にも時々同盟罷工はあつたけれど、キルソンが一たび警告を發すると、翌日から職工が出勤するといふ有様である。米國の参戦以後、英國の特派大使として華盛頓に駐在することになつたレイディング卿は、米國が斯く大統領の指導の下に思ひ切つた活動をするのを評して、これ米國が理想主義の國であるからだ云つて居るが、これも一理ある言ではあらうけれど、兎に角大統領の勢力が頼に加はつたに相違ない。そこで米國の内外に漸くキルソンの專斷を咎むる者があらはれて來た。中には彼を斥してデクタルトとすら評する者もある。此の如き權力集中現象は、一見歐洲諸國の傾向と相背馳した如き觀をなすものであるが、其實は其間に毫も矛盾を見ない。

抑も民主々義といふものは、個人の專制によらず衆議を盡くすに於て、其存在の理由を有するものであるが、其土臺となるべき人民の意見を表するに種々の方法があり、其方法宜しきを得さへすれば民主々義の長所を發揚するのであるけれど、宜しきを得なければ、形式に於て如何に徹底したる民主々義でも、其實無政府の状態に陥るか、否れば專制政治と毫も選ふ所ない状態になる。人民の總投票によつて決するなどは、頗る徹底した民主的方法であらうけれど、ナポレオンは實に此方法によつて其帝位に登り得たのだ。さうでなければ佛蘭西大革命がナポレオンを生む筈がな

い。又キルソンは頻りに民主々義の敵が軍國主義だと力説して居るのを見ると、彼の米國に軍國主義が行はるゝのに反對であることは明瞭であるが、實は此二者は理論の上から必しも相背馳するものではない。獨逸に民主々義が行はれぬから軍國主義が跋扈したと見るのは誤りで、人民が軍國主義を好むから軍閥が跋扈したのだ。唯獨逸國民の謳歌する所の軍國主義が、勝利を得るときまつた軍國主義であつて負けた場合の軍國主義ではない。故に獨逸の軍閥は白耳義中立の蹂躪、其他あらゆる無理な方法を敢てしても、早く目覺ましい成功を博して、以て人民に謳歌されやうとしたのである。失敗したればこそ獨逸に革命が起つたのであるが、若し軍閥の思ふ通りにいつたならば革命は恐らく起らなかつたらう。失敗した獨逸を如何に懲懲すべきかは今予の茲に論せむと欲する所のものではないが、よく耳にする所の、獨逸人を敵とするのではない、猥りに兵を動かして世界の平和を擾亂する獨逸の軍閥を敵とするのだといふ揚言は、理義太だ明白なやうで、實は筋の通らぬ議論である、民主々義は軍國主義と同一ではないけれど、然し必ず矛盾すると定つたものではなく、此兩主義の相合した時には随分專制國にも劣らぬ程平和の擾亂者となる恐れがある。キルソンは勿論ナポレオンではなく、米國の現狀を以て軍國主義流行とは云ひ難いが、軍國主義に陥り易い權力集中の、民主主義旺盛なる米國に現はれるといふことに至つては、必しも奇とするに足らない。表面に現はれた有様の歐羅巴諸國と異なるのは、戦前に於ける兩方の畑に差違があり、歐羅巴で左までに發展して居なかつた民主々義が既に米國に於て餘程進んで居つたからである。現に歐羅巴に於て最も民主的だとの評のある英國に於ては、一方に勞働黨の活躍があ

ると共に、他方には議會の權力の衰頹した傾向も見えるなどは、米國のそれにいくらか類似した歸趣とも云へる。況や米國の大統領といふものは、長くとも二度目の任期が終ると、事實上何人でも永く其職を去らなければならぬので、此點に於て壽命のある限り位を保ち得る歐洲の諸君主や、君主の信任と輿望の如何によつて、年數に制限なく其職に留まり得る宰相などと立場が違ふ。故に再選された大統領が、前の任期の時よりも、後の四年に於て果斷になるといふことが、これ亦有り得ぬことではない。キルソンの場合に就いて之を見るも、周圍の事情彼を餘義なくしたとは云へ、果決なる政策に出づる點に於て、二度目の任期は前の四年に比して遙かに勝つて居る。昨年三月の再度の就職を待たず一昨年十一月再選になつた時からして、差別があるといへばあるやうにも見える。米國に混住する幾多危難なる異民族を打成して一國民となさむとする運動は、近年ローズベルト等の主張によりて、漸く其聲を高めつゝあつたけれど、未だ目覺しい發展を見るに至らなかつたのが、キルソンの參戰により、急激に進捗した。國民化された米國の戦後に於ける活動が、戦前と異なるべきは論を須むない。海を隔つる比隣國なる我日本に、其米國の活動が及ばず直接間接の影響は吾人の最も留意すべき所のものであらう。